

大学の図書館

第43巻第2号 (No.603)

2024 2



目次

詩の^{いと}絃 中筋 知恵 ... 17

特集：世代・経験年数を越えた交流

雑誌コンソーシアム活動の担当を通して経験した団体・世代を超えた交流 北川 正路 ... 18

コミュニケーション雑感 有馬 良一 ... 20

世代間交流に思うところ、対談戯曲もどき 山形 知実 ... 22

コミュニケーションの場としての勉強会 内田 葉 ... 25

学生との関わりを事例としたコミュニケーションにおける工夫 川崎 陽奈 ... 27

地域をこえて大学間を移るということに関する覚書 小山莊太郎 ... 29

詩の^{いと}絃

中筋 知恵

光る^{いと}絃のように、心の底に煌めき続けている出会いがある。

数年前の四月のことだ。新入生でごった返していた図書館カウンターも夕方にはようやく落ち着き、ホッと汗を拭いていたときだった。

「小林多喜二の詩を見せてくれませんか？」

フルートのように澄んだ声が響いた。驚いて顔を上げると、真っ白なコートが目映った。肩に垂れ落ちた黒髪が眩しい。女子学生の薄茶色の大きな瞳が瞬きもせず私を見つめていた。

「それなら全集に載っているはずですよ。本の場所までご案内しますよ」

階段を上って閲覧室に入ると、彼女は書棚の間をひらひらと彷徨いながら人懐っこく話しかけてきた。

「私、近代の詩にハマってまして…。もっともっと沢山の詩を学びたいんです」

私は、近現代の詩の解説本を何冊か彼女に紹介した。そして、自分も詩が大好きなのだと打ち明けると、彼女はサフランが開くようにぱっと笑った。

「え、ほんとですかー。すごい！ 私たち、同志ですね」

その瞬間、金色に震える細い絃が私たちの間にびんと張られたのだった。りんりんと呼び渡る一筋の絃が。

その後、彼女と私はすっかり仲良くなった。ある夜、私たちは夕食を共にしながら好きな詩について熱心に語りあった。

「あなたは詩のどこがそんなに好きなの？」問いかけると、彼女は楽しそうに答えた。

「詩を音読していると、詩人たちの素直な喜びや悲しみがまっすぐに私に届いて、心がきゅんてなるんです。(こんな可愛いこと言っちゃうんだ)とか、(こんな悲しいことをこんなに美しく書くんだ)とか…」

彼女はスマホのカメラで撮ったお気に入りの詩のページを次々と私に見せてくれた。二十二歳で夭折した村山槐多の詩が多かった。彼女の熱弁に耳を傾けながら、この子も二十歳なんだ、と気づいた。若い詩人の魂の声を、同年代の彼女はしっかりと受け止めて、自らの魂と同化させているのだ。何十年もの時代差をものともせず、デジタルとアナログの媒体の違いも乗り越えて、一人の若者が必死に記した魂の叫びが、確実に未来の若者へ届いている…それは何という奇跡的な出会いなのだろう？ 限りなく美しい魂の交感を目の当たりにして、私の心に熱い感動が湧きおこった。彼女と槐多が出会い、そして私と彼女が出会って、ひとつの煌めく絃が生まれたのだ…。

奇跡を起こすのはいつも人と人との出会いだ。心と心をつなぐ一筋の絃。それに巡り会う喜びを求めて、私は今日も、新たな一日へ踏み出してゆく。

(なかすじ・ともえ/小樽商科大学附属図書館)

特集：世代・経験年数を越えた交流

新型コロナウイルス感染症等の影響で、対面で会ってやりとりする機会が減り、従来通りのコミュニケーションが難しくなったと感じている方も多いのではないのでしょうか。その一方、Web会議ツールやチャットツール等を駆使することにより、以前より身軽、かつ気軽に交流できるようになったという側面もあると思います。

今回「世代・経験年数を越えた交流」として、コミュニケーションにまつわるご経験や、意識されていること等を6名の方からお寄せいただきました。みなさまの日常を取り巻く「繋がり」をより良いものとする一助になりましたら幸いです。

(特集企画担当：北海道地域グループ)

雑誌コンソーシアム活動の担当を通して経験した団体・世代を超えた交流

北川 正路

1. はじめに

2022年度末に大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)の運営委員を退任するまで、約20年間、雑誌コンソーシアム活動に関わってきた。

2000年代初頭から、公私立大学図書館コンソーシアム(PULC)幹事校、日本医学図書館協会(以下、医図協)雑誌委員会の担当を務め、2011年度にJUSTICEの運営委員に就任するまでの間、とくに、医図協の担当として、医図協と他団体とのコンソーシアム活動に関する交流が少ないという孤立感に悩んでいた。JUSTICEの開始により、この悩みが解消されつつ、更に、世代を超えた交流を経験することができたので紹介する。

2. コンソーシアム間・コンソーシアム内の交流

- (1) 医図協の雑誌委員会の担当としての経験
2005年前後から、医図協の雑誌委員会の

担当として出版社との契約交渉に取り組むことになった。当時から、医図協は、日本薬学図書館協議会(以下、薬図協)とは共同で交渉にあたっていたが、他の団体とは、コンソーシアム活動に関してほとんど交流がなかった。

背景として、私立大学図書館協会、薬図協、医図協が、2000年12月に、エルゼビア・サイエンス社による円価格設定について、独占禁止法違反の疑いを公正取引委員会に申し立てたことが挙げられる。これは、1990年代からのシリアルズ・クライシスを象徴する出来事であった。この申立てに対しては、2002年7月に、公正取引委員会から、独占禁止法に違反する行為は認められないとの通知を受けた。その後、申立てに関わった方々が、契約交渉の一線から離れつつあり、団体間の連携は少なくなっていった。一方、国立大学図書館協議会(2004年度から「国立大学図書館協会」)(以下、国大図協)は、当初は、円価格問題について抗議声明を出していたが、2000年度からは、エルゼビア・サイエンス社を含めた出版社との交渉により、コンソーシアムによる電子ジャーナル導入の基盤整備を進めていた。私立大学図書館、医図協/薬

図協は、公正取引員会からの通知への対応を考えつつも、私立大学図書館はPULCの設立へと、医図協/薬図協は医薬分野の製品契約拡大へと、それぞれの路線を歩んでいた。

このような時期に医図協の雑誌委員会の担当となった。医図協の委員として、会員の要望を把握し、各出版社にコンソーシアム提案を依頼し、交渉して、独自の方向へと進めばよいのだが、一方で、交渉での出版社の発言を通して、他コンソーシアムの契約内容との調整がなされているのを感じたり、また、医図協/薬図協は分野に特化した団体であるので、雑誌契約の在り方について分野に特化しない包括的なコンソーシアムと意見交換する必要があるのを感じたりして、他団体と交流がないことに不安を感じていた。

PULCについては、幹事校の担当を務めていたため、限られた範囲で、医図協の関係者との懇談をすることができた。国大図協については、接点がないため、医図協の会長から国大図協のコンソーシアムの方々に依頼していただき、懇談の機会を持たせていただいた。

懇談の間は、効果的な雑誌購読という点では意見が一致するのであるが、当然ながら、それ以上、契約内容や利害が関係する内容に踏み込むことはなかった。ただ、医図協/薬図協のコンソーシアムの存在や活動を、人づてでなく、直接伝えるという交流ができたことにより、それまで抱いていた孤立感をいくらか解消することができた。

その後も、他団体と定期的に交流ができないうかという思いで悶々としていたところ、2011年度に、国大図協コンソーシアムとPULCのアライアンスにより、JUSTICEが開始された。

(2) JUSTICEの運営委員としての経験

JUSTICE開始当初から、医薬学分野の図書館からの参加者として運営委員を拝命した。JUSTICEは、国公立大学図書館が会

員で、医図協との共同交渉や意見交換の機会もあるので、医図協は、国内の大学図書館を対象とするコンソーシアムと公式に交流の機会を持つようになった。JUSTICE運営委員就任後に医図協の雑誌委員会の担当は離れたが、担当時に抱いていた他コンソーシアムとの交流が不足しているとの悩みは和らぎ、JUSTICEを通じた交流の機会を大切にしたいと考えた。一方で、共同交渉や意見交換では、同製品の契約に関して、JUSTICEと医図協で意向が一致しないこともあるので、現担当者には、交流に伴う苦労があると思う。

JUSTICEの運営委員会では、世代を超えた交流も経験した。契約交渉にあたり、過去の契約内容を振り返ることがある。その際、2000年代にはまだ図書館に勤務していなかった世代の委員、事務局員の方々からシリアルズ・クライシスの状況についての説明を受けることもあるが、当時を経験していた者として、説明内容は的確に伝わってきて、違和感はない。このように世代を超えた交流においてギャップを感じたり、契約交渉への支障を感じないのは、説明者が、先輩に聞いたり資料を調べたりしていることのほか、各団体にて、当時の記録を後の世代のために保管しているからであると思う。当時を経験している者としていない者の違いは、当時ご尽力された方々の姿や当時の苦労が脳裏に浮かぶか浮かばないかということだけかもしれない。

3. おわりに

団体・世代を超えた交流に関して、雑誌コンソーシアム活動にて経験したことを報告した。他団体との交流がないことで悩んでいた時期のことを伝えたく、歴史的な内容の記述が多くなってしまったことをご勘弁願いたい。

2023年4月から、学内異動により、図書館業務から離れ、国際交流センターの専任となった。文字どおり、学内外、国内外の学生

の「交流」のための部署である。新たな任務として課せられた「交流」をスムーズに進めることができるように、本号の他の執筆者の方々の投稿記事を拝読し、交流の改善に取り組みたいと思っている。

(きたがわ・まさみち／

東京慈恵会医科大学国際交流センター)

コミュニケーション雑感

有馬 良一

およそ10年前の入職当時、暑気払いや忘年会のときには会場に丸テーブルが片手の指以上は出ていたと思う。それが、コロナ禍直前の忘年会の際には3～4脚にまで減っていて驚いた。コロナ禍以降は当然のようにこういった食事会／飲み会の機会は消滅してしまい、あまり復活しそうにはない。コロナ禍がなくても参加者数の自然減やらなんやらで近い将来消滅していたと思う。「飲みにケーション」と並んでよく挙げられる言葉に「タバココミュニケーション」もある。学内外の喫煙所も猛烈な勢いで撤去されていて、こちらも絶滅寸前（本学ではすでに絶滅済）となっている。プライベートを仕事に優先させることは大賛成だし、分煙もどんどん進めていけばいいとは思っているが、そんなこんなでコロナ禍にならなくても、職場における非公式なコミュニケーションの場というものは減っていたし、なくなっていったと思う。

学生時代、部活が終わると家に帰ってSkypeを開き、さっきまで一緒に部活をしていた友人たちと深夜までチャットやボイスチャットに興じていた。その後はLINEが爆発的に流行して家族や友人、知り合いとのコミュニケーションはほぼLINEに一本化された。コロナ禍にはZoomやTeamsが新たに

現したのでこれを使って友人たちとオンライン飲み会をしたし、Discordというアプリを使って面識のない人たちとオンラインゲームなどをしたこともある。大人になるにしたがって地理的・環境的にコミュニケーションの機会が減る友人たちではあるが、インターネットの発達によってこういったコミュニケーションの場は多様化し、かつ増えていると思う。これもコロナ禍によって促進された面はあるが、コロナ禍がなくても着実に進んでいただろう。

本学の附属図書館はそれなりの規模を持つ9つの館から構成されていることが特徴のひとつである。またその各図書館・各キャンパスの間に存在する勾配も特徴のひとつと言えるかも知れない。そんな事情もあって、同じ館のメンバーであればある程度気軽にコミュニケーションを取れるが、他館の職員とはEメールもしくは電話でやり取りをするしかなかった。本学図書館では係の業務のほかに館を横断したWG（ワーキンググループ）があるのだが、こちらのやり取りもML（メーリングリスト）で行っていた。本来ならそれで事足りていたのだろうが、自分が1年目から入っているWGはとても活動が活発で、1日に何通もメールが届き、とてもじゃないが自分の処理能力では話題を把握してついて行かないでできなかった（あるいは勝手に自分をパワーセーブモードに切り替えていたのかもしれないが）。そこで当時WGの主査だった上司に相談すると、LINEをWGのコミュニケーションツールとして採用してくれた。しかしLINEは公私の区別が付きにくかったり、テーマによってスペースを分けにくかったりするなどの問題があったので、その後海外の図書館員に聞くなどしてSlackを導入することになった。今確認すると、LINEの試行開始が2016年6月14日、Slackの導入がその月の30日なのでLINEで仕事をしていた期間は

かなり短かったらしい。しかし、そのとき作成したLINEグループはその後LINEスタンプの作成や飲み会参加の募集、他大学の状況を知りたいときなどに活用されていたりする。ちなみにSlackは現在でこそあらゆる場所で活用されているが、当時は日本語版未整備ということもあり、国内でもかなり導入が早い方だったのではないと思う。Slackのおかげで情報が整理しやすく、またスタンプでの反応や、名乗りや「よろしく願いいたします。」といった定型文の省略などが行え、やりとりはかなり円滑になったと思う。

旧来はEメールしかなかったものが、LINEやSlackなどTPOに応じたさまざまなコミュニケーションツールが出現・成熟してきたことによって使い分けられるようになった現在において、近い間柄であればむしろコミュニケーションの垣根は下がってきているように感じる。

入職当時は若気の至りか（今より）態度が大きかった。「メールなんか追いきれない」とか「この椅子座りにくい」とか色々わがままを言っていて、今振り返ると「なんやこいつ」という感じになるが、そういうことが気軽に言えて、かつSlackを導入してくれたり、マシな椅子を探してくれたりする上司がいてくれた環境であったことはありがたいなと思っている。コミュニケーションというものはひとりではできないので、ささいなことでも言いやすい雰囲気だった職場の環境はとても良かった。ただちょっと話しにくい場でも、自分から一歩踏み出すと途端にコミュニケーションが回りだすこともある（もちろんそうならないこともある）ので、無駄話やわがままがある程度言いやすい環境を職場で作っておくというのは大事だなと感じるし、自分もそういう環境を作っていけるようになればいいなと思っている。

コロナ禍における在宅勤務などの間もSlackを使ったり、Zoomを使ったりすることで特に問題なくコミュニケーションは取れていた気がするな、と今振り返ってみてもそう感じる。大図研の活動においてもこれらのツールをより多くの人が（否応なく）使えるようになったおかげで活動の幅が広がったのではないだろうか。以前までは例会と言えば場所を押さえて、移動時間と交通費をかけて参加していたが、今なら開始時間にパソコンやスマホの前にいれば良いだけになっている。お金も時間も昔ほどかからないので真面目な勉強会だけでなく、簡単な雑談の場を設けることも簡単にできる。鹿爪らしい場で円滑な議論をするためにも、もっと打ち解けた、出入り自由の場のようなところでコミュニケーションをとっていてもいいんじゃないかなとは思いつつ、実際にやってみているがどうも決まった人しか来ない。気軽な会も内輪な会に変わるとそれはそれで敷居が高くなるので難しいところである。

私見だが、文化も情報も伝達の際には、発信→変容→土着化 といった経路をたどっていると思っている。つまり発信された情報が完全にそのまま受容されることはなく、多かれ少なかれその土地やその人の背景や認識による微妙な改竄を受けてその土地や人に伝わらざるを得ない。そしてこの働きはヨコだけでなく、タテつまり時間経過によっても起こる。昨日自分で書いたメモの意味が分からないことはよくあるし、何でこの段落を書き始めたのかももうよく分からない。同じ（と思っている）自分でさえ情報の伝達に齟齬が生じるのにいわんや他人をや、である。語源を引くと、com（共に）uni（単一の）理解をすることがコミュニケーションであるらしい。であれば完全なコミュニケーションなんてできるわけがないのだ。だからこそ（?）、日々の雑談を大事にすることで完璧な相互理解は

無理でも、多少なりとも円滑な人間関係が築けるのじゃないだろうか。

(ありま・りょういち／神戸大学附属図書館)

世代間交流に思うところ、 対談戯曲もどき

山形 知実

■登場人物

- ・ Y：中堅どころの大学図書館員。筆者に少し似ている。Kとは気軽に話せる仲。
- ・ K：Yの先輩で係長。若者を歓迎し可愛がるのが趣味。Yとは気軽に話す仲。

■舞台

北海道のとある大学図書館。「世代・経験年数を越えた交流」をテーマに、KがYの考えを聞いている。

K「職場の人間関係の中で、そもそも、交流の必要性についてはどう感じてる？」

Y「おっ、出ましたねそもそも論。プライベートで仲良くよしにならなくてもいいけど、仕事を円滑にするコミュニケーションは必要だと思ってます。中堅と呼ばれるようになって、最近特にそう思いますね。新人の頃は黙っていても周りから教えてくれるけれど、中堅になったら自分で調べたり聞いたりしないとイケないし、なにより、周りを巻き込んでやる仕事が増えてきて。いろんな方に仕事をお願いしたり、意見や都合を聞いたりしますし、そういう仕事をするうえで、相手の人となりや業務上の得意不得意、経験値を知っていると、すごく仕事がラクになるんですよ」

K「うんうん、今回、“交流”っていう言葉で表現しているのは、相手の人となりや

経験を知るためのコミュニケーションのことって捉えてもらっていいよ。そっか、Yちゃんがもう中堅とは感慨深い。うまく仕事をお願いしたりされたりできる関係って、どうやって作ったらいと思う？あるいは、どうやって作ってきた？」

Y「私はコロナ前に入職したんですよね。年に2、3回、図書館全体での懇親会がありましたし、お昼ごはんを先輩と食べたり、夜ごはんを食べに行ったり、っていう機会も日常的に結構あったんですよ。まずはそれだったかな」

K「してたねー。私にとっても、若者とお近づきになるいい機会だった！学生時代の専攻を聞いたりね」

Y「うちの大学、吹雪の日は学生の遭難を心配するくらい広いじゃないですか。部局図書室も20以上あって、全職員と仕事をしたり話したりする機会はなかなか無いので、私はそういう場で皆さんの顔と名前を一致させたり、ご経験を伺ったりしていましたね」

K「うんうん」

Y「それから、世代・経験年数を越えた交流の場としては、勉強会の存在感が大きかったですね」

K「職員の自主的な勉強会ね。有志の世話人が月に1回くらい、終業後にやっていたやつだね」

Y「そうです。これちょっと見てください。“勉強会の効果についてのアンケート”の回答結果なんです」

—Y、ポスターを出してKに見せる。

K「おお、世代めっちゃばらけてる」

Y「20代～50代までかなりばらけているでしょう。これはあくまでこの時のアンケート回答者の年齢ですけど、各回の勉強会参加層や、職場内の年齢構成を遠か

「勉強会の効果についてのアンケート」回答結果

北海道の図書館職員を中心とした有志による自主的な勉強会(仮) | kamaitachi1203@googlegroups.com

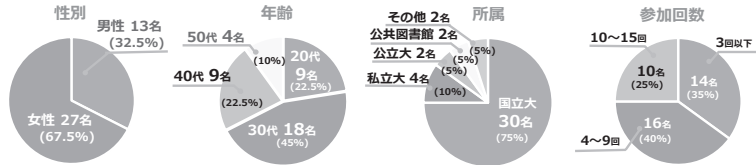
勉強会の現状とアンケート調査の目的について

勉強会は毎月1回開催され、道内外から十数名の参加者と講師を招聘し、図書館員の研習に役立つプログラムを企画している。このたび20回目を迎えるにあたり、参加者の満足度、勉強会によって行動の変化があったかどうかを把握するとともに、今後の運営に向けての課題点を明らかにすることを目的に、アンケート調査を実施した。

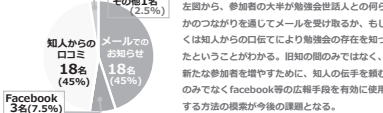
調査対象とアンケート回収方法および回答数について

これまでに勉強会に講師として参加した主に図書館職員、および講師として招聘した道内外の方々96名を対象に、Googleアンケートのフォームから回答する方式で、2016年8月、約2週間アンケート回答を受け、最終的に40件の回答を得た。

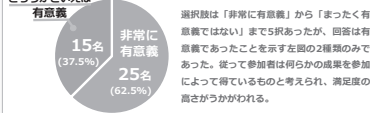
アンケート回答者について



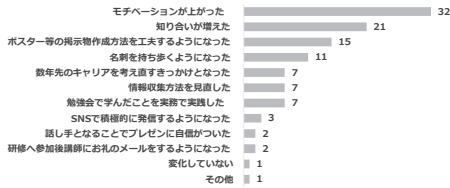
勉強会をどのように知りましたか？



勉強会の効果は？



参加によって行動や意識の変化はありましたか？ (複数回答可)



回答結果からわかることの1点目は、回答者40名中32名(80%)が勉強会によって業務へのモチベーションが上がったことを実感している点である。図書館職員として必要な問題提起を多様なテーマで講演し、情報交換を行うことが業務の中での問題解決に繋がり、次のキャリアアップへの導入となっていることが予想される。

2点目に顕著な傾向としては、知人の増加、つまりは同僚相互のつながりの強化である。実際的に知人が増えることのみならず、意識の上で仲間同士の関わりを得ることで、勉強会という場が安心感を生み出す相互交流の場としても役立っていることが示されている。

3点目は、情報収集方法の見直し、掲示物作成方法の工夫など、実際の業務において勉強会で得たことを生かしている例も多いため挙げておられる。

【発表者限定】発表によって得たものは？

- ・他人の反応が直観的だった
- ・壁々と発表できる図書館へ、さらに頑張ろうと思えた。
- ・話したことがヒントになった、行動を変えようきっかけになった、と書いて頂いた
- ・テーマを深く掘られたこと
- ・参加者の方との出会いがあったこと
- ・プレゼン慣れすることができた
- ・事後アンケートでフィードバックをもらえることがよかった
- ・プレゼン後に感想・ご指摘を頂くことで、反響次第に活かすことができる

まとめと展望

参加者の勉強会に対する感想を書いていただいた自由記述からうかがわれることは「モチベーションがアップした」「刺激をもらえた」「講演から今まで気づかなかった視点を学べる」など、研修の場としての満足度は極めて高いことである。「気軽に他大学の人の話を聞ける貴重な機会」という声からは、図書館相互のネットワークを実現している場としての勉強会の意義が実感できるし、また、「バラエティに富む企画」「遠隔地からウェブ視聴参加できるのが嬉しい」という感想もあり、常に参加者のために工夫をこらす運営側の努力が大声に評価されていることが示されている。「資料・アンケート結果の公開」を評価する声も多く、聴講のみに留まらずフィードバックを有意義に行っている参加者および発表者の存在が印象づけられた。今後の課題としては、参加者所属の幅が広がり、それと関連して、勉強会についての周知をより外部へ広めるための方法の工夫が提起されるものである。

らず反映している実感があります。参加による行動や意識の変化についての欄で、2番目に「知り合いが増えた」が挙げられていて、「実際的に知人が増えることのみならず、意識の上で仲間同士の関わりを得ることで、勉強会という場が安心感を生み出す相互交流の場としても役

立っていることが示されている。”というコメントがありますよね。私もそのとおりだと思います。参加者同士の交流を促すようなアクティビティも多かったし、異動や新任で来た方の自己紹介がメイン企画になる回があったりして、かなり交流できていたんですよ。この勉強会

に参加していたことは、コロナ前の私にとって、世代を超えた交流をする上でのひとつの成功体験だったんですね」

K「なるほどお」

Y「で、コロナになってから。席にはついたてが設置されて、学外の会議や研修はすべてがオンラインベースになって、時差出勤や在宅勤務も導入されて、Slackがメインのコミュニケーションになって、同じ係の人とさえずごく接点が減っちゃいました。業務で直接かかわる範囲にほとんど新人さんが入ってこなかったこともあって、新しい交流はほぼ生まれなかったと言っているんです」

K「そうなんだ。今は在宅勤務もなくなって、研修なんかも対面が復活しつつあって、オンラインでしか会ったことない人にリアルで会う機会が増えてきたんじゃない？」

Y「まさにそれで気づいたことがあるんです！オンラインでしか会ったことがない人って、業務上気兼ねなくコミュニケーションがとれる間柄とはなかなか言えないなと」

K「TVの中の人みたいな？」

Y「そう、顔と名前を知っていても存在が遠いんですね。なので、今後対面でお会いできるチャンスがあれば、シッカリ捕らえていきたいと思っています」

K「オンラインのみの交流で相手との距離がどのくらいになるかは、世代差が出そうだね～」

Y「そうですね。それから、今の気持ちとしては、業務時間内での交流機会をもっと増やしたい、増やしてほしいというのが強いです」

K「業務時間内、がポイント？」

Y「はい、業務時間内です。コロナ前の私にとっては飲み会や時間外の有志の勉強会の場がよい機会でしたけれど、そういう

のが苦手な人もいるし、時間外のお付き合いは、ライフステージや気分によってもお付き合いできる度合が変わりますよね。子供が小さいうちや介護があれば飲み会には出ない、出られないとか、新しい職場だから最初は顔を出そうかな、とか、仲のいい人がいるから行こう、とか」

K「それはそうだ」

Y「私自身のライフステージとしても、今はプライベートを大事にしたい。そもそも周りに関わる業務が増えたことも大きいですね。だから最近では、時間外のコミュニケーションに頼りすぎずに、業務時間内の交流をもっと大切にしたいなと思ってているんですよ」

K「具体的な行動も変えつつあるの？若者と話したいけど話せないって、いつもシャイぶってるじゃん」

Y「本心です（笑）。とても些細なことなのですが、メールするほどですらない“OK！”とか“ありがとう”みたいなお返事は、ちょっと行って直接伝えてみたり、どう思う？みたいにちょこちょこ意見を求めてみたりを心がけています。直接話しかけるのって相手の時間を奪う面もあるので、一長一短なのですが…。雑談は、何かを一緒にやった時が一番言葉を交わしやすいので、キャンパスクリーンデーでゴミ拾いしている時とか、雪が降る前の駐輪場の片づけの時とかに勇気を出して話しかけてみたりしています」

K「Yちゃんが言ったとおり、うちのキャンパス広いから、そのやり方だと物理的に遠い場所にいる人とは交流が持ちにくいんじゃない？」

Y「そう、それは欠点。遠くの部署に配属された新人さんとは特に難しい！でも今はもう、ある程度は仕方ないかなと割り切っています」

- K「人事異動でいつか近くに来ることに期待か。話しかけ作戦の効果のほどは？」
- Y「少なくとも私の側からは、気軽に話しやすくなった人が結構いるので、効果アリでした。相手にとってどうかはわかりませんが(笑)。歓迎会や送別会も、アフターファイブの飲み会形式にこだわらず、ランチタイムをご一緒したり、支障のない範囲で終業前になにかお渡ししたり、みたいな形がいいなって感じていますね」
- K「ほほう～。コロナを経た中堅はリアルな業務時間内交流を求めているんだね。一例として興味深かったよ。ありがとう～」

「勉強会の効果についてのアンケート」回答結果. 2016, 09. "北海道の図書館職員を中心とした有志による自主的な勉強会(仮)" 成果物. <http://hdl.handle.net/2115/62828>

(やまがた・ともみ／北海道大学附属図書館)

コミュニケーションの場としての勉強会

内田 栞

図書館員というのはとかく勉強会が好きな人種だと思う。業務外での自主的な勉強会がこれほど多く開催されているのは珍しいのではないだろうか。多分に漏れず、私も勉強会が好きだ。普段の業務ではなかなか聞くことができない話を聞くことができるし、自分の仕事を見つめなおす機会にもなる。そして、これは多くの方が賛同くださるのではないかと思うが、勉強会は横のつながりを作るコミュニケーションの場でもあると思っている。京都大学は多くの図書館・室があり、部署も多い。勉強会に参加することで普段は会えない同僚と会うことができ、情報交換ができる。名前は知っているけれど話したことが

ない、という相手と仕事をするのと、話をしたことがある相手と仕事をするのでは、仕事のやりやすさや楽しさが全然違う。勉強会は業務でのコミュニケーションを円滑にする側面も持っているのだ。

私には現在5歳、2歳、2か月の子どもたちがいる。2人目の育児休業を終えて職場復帰して以降、私は働きながら得も言われぬ寂しさともどかしさを感じていた。育児のため早出勤+昼休み15分短縮という勤務形態で、ほとんど定時には退勤する。そうすると、同僚の始業時間前は自身が勤務中、食事が遅い私は昼休みも食事でほとんど費やしてしまい、そして、同僚の勤務中に退勤することになる。こうなると、業務外の同僚とのコミュニケーションの時間が全くないのである。他愛のない雑談をする時間すらほとんど取ることができない。話をしたい人や聞きたい話はたくさんあるのに、その時間がない。仕事も忙しく、目の前の業務のことしか考えられない、余裕のない状況が続いていた。そして、残念ながら京都大学図書系職員で定期的に開催していたku-librarians勉強会はコロナの影響もありお休み状態、それ以外の勉強会にも夜の時間や土日はなかなか参加ができない。

このもどかしさを解消するためには自分で勉強会を企画するしかないなと思いつつ、躊躇っていたが、今年度9月から3人目の産休で職場をしばらく離れることが分かり、「やるなら今しかない!」と思い切って、自分が唯一自由に使える昼休みに勉強会を開催してみることにした。

自分が無理なく運営できること、そして気軽に参加できることを念頭に置いて企画を考えた。勉強会の概要は以下の通りである。

タイトル：昼休みミニ勉強会

期間：2023年6月～9月

時間：12時10分～12時40分の30分間

形態：オンライン (zoom)

内容：発表者に自身の経験について話しても

らう

対象：京都大学職員であれば誰でも（出向者も含む）

事前申し込み：不要

広報：入職15年目以下の常勤職員・希望者にメールにて、周囲に興味がありそうな人がいたら転送して欲しいと依頼した

勉強会の目的は①業務時間内ではなかなか聞くことのできない話題を聞くことで、自己研鑽・業務理解の機会とすること、②顔や人となりを知っている同僚を増やすこと、とした。発表者と参加者の双方向のリアルタイムでのやりとりはなかなか難しいため、勉強会後に「コミュニケーションカード」と称したアンケートを配布して、発表者への質問や感想を記入してもらい、それを発表者へ返すこととした。

自身で勉強会のための部屋や機器を用意することができなかったため、職場の会議室・機器を使わせていただくべく、簡単であるが企画書を用意して、部課長に会議室と機器の使用許可をお願いしたところ、快く貸していただけることとなり、また企画へのアドバイスもいただき、大変有難かった。

結果として、6回開催することができ、各回20～30人、のべ約170人が参加くださった。常勤職員のみならず、事務補佐員、派遣職員も多かった。発表者はなるべく幅広い年代で、と考え、出向経験のある課長・掛長、入職3年目・5年目の若手職員、そして退職されたOGにも依頼することができた。

前述したコミュニケーションカードは各回5人前後の回答があった。また6回目終了後に全体アンケートを依頼したところ12人からの回答があった。勉強会への意見・感想を見ると、「名前しか知らなかった人の顔や経験を知ることができて良かった」「幅広い内容・世代の発表を聞くことができて勉強になった」という意見が複数名より寄せられ、目的②は達成できたと思われる。これによっ

て参加者の業務上でのコミュニケーションが少しでも円滑になったら良いと思う。

発表者の負担をなるべく減らすべく、私との対談形式にして事前準備を減らす回もあった。対談形式が受け入れられるのか不安であったが、コミュニケーションカードを見ると好評で、良かったと思っている。（私のインタビューは慣れないことでごちなかったと思うが、複数人から「徹子の部屋みたいだった」と言っていただき、楽しんで聞いてもらえたのかなと嬉しく思った。）

昼休みという時間帯は、気軽に参加できて良いという声があった一方で、カウンター当番や個人の事情により参加しにくいという声もあった。アーカイブ配信が欲しいという要望が1回目から一定数あったのだが、事前申し込み制ではないためアナウンスが難しいこと、また私1人でアーカイブの保存・公開など管理するのは難しかったことから実現できなかった。

また、会場・配信セッティングはある1人の同僚が毎回協力してくれた。12時から昼休みで、12時10分から開始というのは、非常にタイトで、私1人で全てやっていたら、12時10分開始はとても無理だったであろう。また、配信中のzoom管理も、司会等を行いながらは難しかったために、本当に助けていただいた。この点でも1で行うことの限界を実感した。

当初は自身のもやもやを解消するために開催した勉強会で、私に加えて数人が参加してくれたらいいな、と思っていたところに、私の予想を遥かに上回る人が参加くださり、好意的な感想も多くいただけた。正直なところ、業務は忙しく、帰宅すれば育児に追われ、自分の時間がなかなか取れない中、そして妊娠中でいつ体調を崩して休むことになるか分からない不安の中、勉強会を続けるのはやはり大変だった。だが、私のように、こういった気軽な勉強会やコミュニケーションの場を求

めている人が多いと分かったことにとっても励まされた。そして(自己満足かもしれないが)その場を少しではあるが提供できたのではないかと思っている。職場復帰したらまたやりたいが、1人でやるとすれば、頻度を減らすなど、やり方を再考して、持続可能な形を検討する必要があるだろう。

私が入職した10年前に比べて、業務量は増える一方で人員は減り、職場でのあそびはどんどん減っていると感じている。余裕がなく、目の前の業務のことで精一杯になってしまいがちであるが、なんとか業務外でのコミュニケーションの場やあり方を模索していきたいと思う。

(うちだ・しおり／京都大学附属図書館)

学生との関わりを事例とした コミュニケーションにおける工夫

川崎 陽奈

1. はじめに

一口にコミュニケーションと言っても相手や場面によってその内容は様々ですが、根底では実は共通している要素も多いのではないのでしょうか。

私事ですが、2023年6月末で5年と3ヵ月勤務した大学図書館から異動し教務課へと移りました。コミュニケーションという視点では、図書館では教員や取引先とのやり取りが主でしたが、異動先では一転して学生とのやり取りが主となりました。

コミュニケーションの相手や立場が変わったことで戸惑う部分もありますが、個人として意識し実践していることは、それほど変わりません。そこで本稿では、教務課での学生との関わりを例に、コミュニケーションについて工夫していることや考えていること、課題をご紹介します。

2. 学生とのコミュニケーションにおける工夫と難しさ

教務課に異動し、7つある学部のうち1つの学部を担当することになりました。本学では教務課の職員はシステム担当等を除けば、1人1学部又は1学科を担当し、その学部学科の教務に関すること全般を担います。

したがって、担当する学部の学生からの相談は基本的に、その学部の担当者1名がまずはすべて受け止めることとなります。

これまで図書館で担当してきた業務では、電話やメールでの問い合わせ対応や、図書館の利用説明会で学生と接することはありましたが、直接的なやり取りは少なかったため、コミュニケーションにおいて、学生とのやり取りが増加したことは異動に伴う最も大きな変化でした。

学生は多くの場合、何らかの困りごとや相談を抱えて窓口を訪れます。コミュニケーションの場は対面である窓口のみとは限りませんが、一例として窓口での業務を挙げると、学生が窓口を訪れる理由は大きくは以下のように分けられます。

- ・卒業要件の確認など明確な質問があって訪れる学生
- ・留学や休学に伴う履修相談など、具体的な相談がある学生
- ・このままで卒業できるか心配など、不安を抱えて訪れる学生
- ・成績不振などに伴う面談でこちらから声をかけて訪れる学生

これら以外にも日々、様々な理由で学生が窓口に来ますが、学生とのやり取りにおいて共通して意識しているのは次の点です。

1. 話を遮らずに最後まで聞くこと
2. 質問であれば答える前に何が知りたいのか、認識に齟齬がないかを確認すること

3. 話を聞きながら本当に困っていることが別にないかを意識しておくこと
4. やり取りの最後に他に不明な点や不安がないかを尋ねること
5. 必要があればまたいつでも来るように伝えること

相談を受けるにあたっては、最初に学生の話当真に聞くことを心掛けています。学生自身も話しながら相談したいことを整理することもありますし、話しているうちに自分の課題に気づいてはっとした顔になることもあります。まずは学生の話聞き、次に質問を交えながら、相談したいことや知りたいことを整理し、認識に齟齬がないかを確認することで、担当者の思い込みで話を進めてしまうことも避けられます。

また、学生の話聞いてると本当に困っていることは別にあるけれども、その相談をしてよいものと迷っている場合や、それをどのように聞けばよいのかが分からないといったこともしばしば見られます。そのため、他にも聞きたいことがあるのではないかという視点から、必要に応じて学生に問いかけ、知りたいことや不安に思っていることを聞き出すように意識しています。

せっかく窓口を訪れたものの本当に気になっていることを聞くことができないまま終わったということでは意味がありませんし、次に窓口を訪ねてくることはないかもしれません。

加えてやり取りの最後には、必ず不明な点がないかを確認し、必要があればまたいつでも来るよう伝えてサポートをする姿勢を分かりやすく示すことを心掛けています。不明な点がないかなどの声掛けをすると追加の質問が出てくることもありますし、少し安心した顔で「また来ます」と帰っていくこともあります。

一方で学生とのコミュニケーションの難し

さとして、なかなか連絡が取れない学生に何度もアプローチをして面談をするときや、授業に出席できなかったり、単位が思うように取れなかったりと悩む学生の話聞き、どうすればよいかを一緒に考えるときなどは対応に悩むこともあります。学生に寄り添って対応することを心掛けていますが、それだけでは本人のためにはならない場合もあり、どうい言葉をかけてどのような提案をするべきなのかといったことも事例ごとに考えさせられます。

またそもそも困っているのに窓口を訪れることができない学生を、他部署と協力しつつどのように拾い上げて相談につなげるかもコミュニケーション上の課題と言えるかもしれません。窓口でなくとも電話やメールでつながることができれば、その後も継続してサポートができますが、そういった学生はなかなか自分から大学に相談するのは難しいことが多いと思います。そういった面で、まずは話を聞く以前のつながるところの難しさも感じています。

3. 職員同士のコミュニケーションとの共通点

先ほどご紹介した学生とのコミュニケーションで工夫している点は、職員同士のコミュニケーションにおいて意識していることも重なります。学生と職員とでコミュニケーションの相手も内容も異なるため、当然すべて同じようにというわけではありませんが、例えば業務の引継ぎや担当業務に関する質問を受けるときなどは、相手の持つ疑問点を解決し、不安を解消できるように特にそれらを意識するようにしています。

他にも、具体的な事例として図書館で勤務していた時は、電話中以外であれば遠慮なくいつでも声をかけてほしいと日頃から周りに伝え、話しかけられた時にはそれを実際の行動で示すように意識していました。

現在も学生が事務室を訪れた時には、まず

は意識を向け、時にはアイコンタクトをとり、対応が必要であることが分かればすぐに窓口で話を聞きます。学生にとっても声をかけづらい雰囲気であるよりも、職員が自分のことを気にかけていることが分かれば相談もずっとしやすいはずです。

同様に職員同士のコミュニケーションにおいても、声をかけやすい姿勢を心掛け、それを実際に行動で示すことは、円滑なコミュニケーションや業務遂行につながるのではないのでしょうか。

4. 終わりに

本稿では学生とのコミュニケーションを例に、個人としてコミュニケーションにおいて工夫していることや考えていることを紹介しました。異動先の部署における個人の経験の一部ではありますが、本稿が図書館における業務や個人間のコミュニケーションにおいて参考になりましたら幸いです。

(かわさき・はるな／西南学院大学)

地域をこえて大学間を移るということに関する覚書

小山莊太郎

個人的な経歴を振り返ると、地域をこえて所属先を移ることを経験したのは、中学校・高校と出身地の神奈川県から東京都にある教員養成系大学の附属学校に通った頃に遡るのかもしれない。毎朝東京への満員電車に乗ることに困惑しつつも、専任の司書の方がいる学校図書館を経験することができたし、居住地の市立図書館と同時に通学先の区立図書館の中央館や分館にも通うことで、地域ごとの図書館の特色ということを意識するようになった。もしこの地域をこえた図書館との新しい出会いという経験がなければ、その後大

図研でも中間的な地域とはいえ、4つの地域グループに加入し活動する現在には至っていなかったのかもしれない。

また毎年多くの大学生の教育実習が行われる学校生活を過ごす中で、附属学校という場から大学に接し始めたことは、大学の様々な機能や要素への関心につながったようにも思う。当時は後に大学図書館員として附属図書館で働くことや、1年間医学・病院管理部に所属して毎日附属病院の中を歩いて医学部図書館の仕事をする日々を全く想像していなかったけれども、今にして思えば「附属」という独自の機能を担いつつ大学全体の目的に貢献する存在を知る、現在につながる経験であったとも言える。

歴史学を専攻できることから進学したのは長野県の大学だった。家族も含めて特に地縁も無く、旅行それも日帰り一度訪れただけの都市に所在する大学に東京会場での受験で入学したので、想像以上の夏の暑さと冬の寒さに戸惑いつつも、一から新たな地域を知る大学生活を送ることになった。日本近現代史ゼミで長野県などの地域史について学んだこと、県単位で編成された地域の国立大学を学生として経験したこと、また旧制高校時代の建築や記念館があることで旧制高校の歴史を知ることが出来たことなどは、その後また別の県の国立大学に入職する際にやはりつながっていく経歴となった。

神奈川県に戻り、今度は東京二十三区内の私立大学の大学院に通うことになった。山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムによる相互利用の制度によって、一駅先にある他大学の図書館資料も容易に利用可能な利便性など、私立大の特色や東京という地域の独自性を実感した。またリサーチアシスタントとして大学内のアーカイブズで資料整理作業に従事してアーキビストの方に接し文書館の実際を学ぶと共に、大学内の部局の業務や運営に身近に接する機会にもなった。

大学院を出てから、かつて附属学校に通っていた東京都内の国立大学に非常勤職員として勤めることになった。偶然改修移転工事の関係で司書資格未取得でも応募可の募集があり、改修工事関係の作業や配架、カウンターや夜間の閉館作業などの担当として働き始めることになった。この頃には同時に別の大学でオンライン形式での司書講習を受講し、更に別個の大学が行っている放送授業での学校図書館司書教諭講習でも学んでいたので、地域をこえて複数の大学に接していたということにもなる。

実務・資格取得と並行して受験していた国立大学法人等職員採用試験では、当初受験していた関東甲信越地区で不採用となった後、他地区での図書系職員採用について希望を出したところ、秋以降に他地区の大学で行われた選考に応募することが出来た。そして東京都内の国立大学の非常勤職員を退職して、東海北陸地区の国立大学に入職することになった。

地区をこえての選考とはいえ、初めて三重県を訪れたのも採用面接当日という身であったので、帰途に近鉄電車で揖斐川・長良川の鉄橋を渡る際、果たして今後再訪する機会があるのだろうかと不安も感じていたのを覚えている。幸い、かつての長野県での経験も活かして地域連携関係の業務にも取り組んでみたいと述べたことも評価していただけたのだろうか、厳密には異動ではなく退職と入職という形にはなるけれども、地区をこえて別の国立大学に移るということになった。

8か月間だけとはいえ、漸く大学図書館でのカウンター業務などを多少とも理解し、教育実習の準備や現職学校教員の利用といった教員養成系大学ならではの利用者にも慣れ、改修工事を通じて他係も含めた職場の方々からも何かと教わっていたところだった。それだけに採用後は大きく様相が変わり、電子ジャーナルや機関リポジトリなどの新たな担

当業務についても学ぶ必要が生じた他、財務系の業務など学内他部署との連携や出版社・代理店など学外の関係企業とのやりとりなども初めての経験であったし、他部署や各学部についての知識や学生・教員による図書館利用の様子といった大学全体に関する前提となる情報の不足を感じる場面も多かった。

そういった状況の中で採用当時の上司たちから受けた助言は今振り返っても有難いものだったと感じている。事務系職員の管理職であった上司からは、大学図書館以外の他部署の職員とも交流することについて助言を受け、更に他部署の若手職員を紹介していただいたりもした。大学の一員として大学全体について関心を持ち、他部署の職員との交流を意識すること、そのことが大学図書館の業務を進める上でも不可欠ということ、この助言とその後の他部署の職員たちとの関係は、後に全学の図書館から異動して医学部図書館に約10年ぶりの図書系職員として配置された際にも、とても有難いものとなった。

また図書系職員の管理職であった上司からは、大学全体や他大学、関連企業や地域社会などについても知ることも、とりわけ日常的に担当業務以外にも幅広く関心をもって相互の交流の中から学ぶことの大切さを教えていただいた。上司ご自身も1年前に他地区の大学から異動されて間が無かったとは思えない程、様々な関係者との交流を深めた大学や地域の幅広い話題に関心を抱くということを実践しておられて、まずは関心を持ち、日常的に少しずつでも知見を拡げることが関係者同士の課題の共有や交流につながるということを改めて認識することとなった。日頃の会話の中でも、大学周辺や市内の各地を散歩したり地域の博物館や図書館を訪ねたりした際の話についても聞いていただき、地域を知ることについて日常的に励ましていただいたのも有難かった。

昨年家族の事情で三重県から出身地の国立

大学に異動してからも、市民ボランティアや障害者サービスなど未経験の業務も担当する中で、かつての上司たちからの他部署や地域に関する助言が基本的なものであることを改めて感じている。

月並みなまとめかもしれないけれども、複数の地域や機関での経験を踏まえながら大学全体や所在する地域社会について関心を持ち、少しずつでも自分なりの方法で日常的に知見を深めることは地域をこえて他者と相互に課題を共有する上での前提であり、地域はわれらを豊かにするという確信は、公共図書館に限らず大学図書館の場合でも重要な視点と感じている。

(こやま・そうたろう／

横浜国立大学附属図書館)

事務局組織担当より

新規会員募集中!

日頃より組織運営にご理解、ご協力を頂きましてありがとうございます。

会員の皆さまの周りに大図研にご興味をお持ちの方はいらっしゃいませんか。もしくは知見を拡げたい、図書館関係者とのつながりを増やしたい、学べるイベントに参加したいといった意欲をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ大図研にお誘いください。

入会に関してご不明の点がありましたら、お気軽に組織担当までご連絡ください。一人でも多くの方のご連絡を心よりお待ちしております。

事務局組織担当: soshiki@daitoken.com

大学図書館研究会 入会案内・入会申込ページ

https://www.daitoken.com/admission_guide/index.html

会員情報（会報の送付先住所、メールアドレス、所属など）について変更があった場合も、組織担当までご連絡ください。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

大学の図書館 第43巻第2号 (No.603) 2024年2月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854
編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0033 茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付

E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館研究会

2023/2024年度 運営サポート会員を募集します

常任委員会

本年度も、会務をサポートする運営サポート会員を募集いたします。我こそは、と思う
会員各位、お問合せ先までご連絡をお願い申し上げます。

なお、諸般の事情で、お申し出に添えない場合もございますので、ご了承ください。
今回募集するのは、以下の委員会です。

- ・研究企画委員会
- ・会報編集委員会
- ・会誌編集委員会
- ・広報委員会
- ・記念出版物編集委員会
- ・事務局出版担当
- ・事務局組織担当

業務の内容は、お問合せくださった方に、常任委員の担当からご連絡いたします。

【問い合わせ先】

大図研事務局 dtk_office@daitoken.com